

<書 評>

村岡恵理

『アンのゆりかご：村岡花子の生涯』

(新潮社, 2011年, 431頁)

軽 部 恵 子

2014年3月31日, NHK 連続テレビ小説「花子とアン」(平成26年度前期, 第90作)の放送が始まった。放送も3分の2が終わったが, 平均視聴率が20%を越え, 大変な人気を博しているという。ドラマの原案は, 『赤毛のアン』を日本で初めて翻訳した村岡花子の孫娘の1人で, 作家でもある村岡恵理が提供した。原案の元になったのが, 本書『アンのゆりかご：村岡花子の生涯』(新潮社, 2011年)である。

著者の村岡恵理は1967年に生まれ, 祖母の母校でもある東洋英和女学院高等部を卒業し, その後成城大学文芸学部を卒業した。1991年以降, 祖母の著作と蔵書を姉である翻訳家の村岡美枝とともに保存し, 「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」を主宰する。

『赤毛のアン』の原作は, L.M. モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery, 1874-1942) の *Anne of Green Gables* である。1908年にカナダで出版されたが, 日本で村岡花子の手による訳書が刊行されたのは, 44年も経った1952年であった。原作の初版から110年以上, 邦訳出版から60年以上を経て, 『赤毛のアン』とその翻訳者に対する関心が日本で再び高まっている。

本書は, プロローグとエピローグに加え, 10章から成る。プロローグは, 「戦火の中で『赤毛のアン』を訳す：昭和20年(1945)4月13日, 太平洋戦争が終結する4ヶ月前」と題される。第1章「ミッション・スクールの寄宿舎へ：明治26～36年(1893～1903, 誕生～10歳)」, 第2章「英米文学との出会い：明治37～40年(1904～07, 11～14歳)」, 第3章「『腹心の友』の導き：明治41～大正2年(1908～13, 15～20歳)」, 第4章「大人も子供も楽しめる本を：大正3～6年

(1914～17, 21～24歳)」、第5章「魂の住家^{すみか}：大正7～10年(1918～21, 25～28歳)」, 第6章「悲しみを越えて：大正11～昭和2年(1922～27, 29～34歳)」, 第7章「婦人参政権を求めて：昭和3～13年(1928～38, 35～45歳)」, 第8章「戦時に立てた友情の証：昭和14～20年(1939～45, 46～52歳)」, 第9章「『赤毛のアン』ついに刊行：昭和21～27年(1946～52, 53～59歳)」, 第10章「愛^{いと}おいしい人々, そして本：昭和28～43年(1953～68, 60～75歳)」である。

エピローグは「『赤毛のアン』記念館に、祖母の書斎は残る」と題する。その後に、文庫版あとがき、注釈、村岡花子関連年表、主要参考文献、Special Thanks, そして作家の梨木香歩によるエッセイ「『曲り角のさきにあるもの』を信じる」が寄せられた。

各章のタイトルが、村岡花子の人生の主なできごとを端的に示している。また、副題に具体的な年代と年齢が付記されている。花子は明治から昭和を生きたため、元号と西暦の双方が明記されているのは、読者にとってありがたい。

それから、NHKの「花子とアン」の主人公は役の上で年齢を重ねてもどこか若々しいが、『赤毛のアン』が初めて世に出たのは1952年である。1893年まれの村岡花子は還暦目前となっていた。*Anne of Green Gables* の邦訳タイトルをどうするかで悩んだあげく、あまり気に入らなかった編集者の提案「赤毛のアン」に決めたのは、20歳だった娘みどりが大賛成したからで、花子は若い人の感性に賭けたのであった(pp. 325-327)。人間の行動決定に年齢はしばしば重要な要因となるので、読者には花子の年齢と対比しながら各章を読んでもらいたい。

本書は、NHK 連続テレビ小説「花子とアン」と内容が完全に合致しているわけではない。番組終了時に「このドラマはフィクションです」という断り書きが毎回提示されるが、ドラマに描かれた人物やできごとと、本書の記述はかなり異なっている。ドラマを見て、村岡花子の人生に大いに興味をかき立てられた人には、ぜひ本書を手にももらいたい。

当然、本書の価値は史実とフィクションの区分に留まらない。たとえば、評者が本書を手にとって読むまで、村岡花子という人物は「赤毛のアン」シリーズなどの翻訳者という程度の認識しかなかったが、それは大きな誤りであった。花子は、キリスト教精神に基づく環境で薫陶を受け、妻を対等なパートナーとして接する夫に恵まれ、子育てをしながら翻訳やラジオの仕事を続け、関東大震災で夫の印刷会社が大損害を受けると家計を支え、女流文学者や市川房枝らとの交流を

通じて婦人参政権運動に貢献した。戦後も、著名人來日時の通訳、講演会への出席、エッセイ等の執筆を通じて活躍した。つまり、花子は今日的に表現すると、女性の人權、ひいてはジェンダーの平等を体現した人である。巻末の梨木によるエッセイの一部をここに引用したい。

「本書には、ただ村岡花子一人の女性史のみならず、彼女が生きた時代の女性たちの意識、彼女たちの置かれた社会的地位、葛藤までもが丹念に描かれている。中でも、市川房枝に対する言及は、簡潔ではあるが、各時代の要所要所に的確に入っていて、婦人参政権獲得運動の歴史が実に端的に浮かび上がる仕組みになっている」(p. 430)。

本書に記された花子の人脈を見れば、梨木の指摘も容易に納得できる。とにかく、花子に連なる人々の顔ぶれは「すごい」の一言に尽きる。たとえば花子の初恋の人、澤田廉三は外交官となり、日本の国連加盟に尽力した。彼の妻、澤田美喜は岩崎久弥（三菱財閥の三代目）の長女だが、エリザベス・サンダース・ホーム（第2次世界大戦後、日本に進駐した連合軍兵士と日本人女性の間に生まれた子どもたちのための施設）の創設者であった。財閥解体後、ホームの運営資金調達に親は頼りにできなかった。戦後、ホームを訪れた花子は、美喜の正義感に感動し、夫婦ぐるみで親交を深めたと言う（p. 314）。

花子の短歌の師は佐佐木信綱（1872-1963）だが、1937年に第1回文化勲章を受章した人物である。花子の翻訳者としての力量は、英語力のみならず日本語の力にあることは言うまでもないが、彼女に日本語を磨く貴重な場を与えたのが佐佐木であった。彼の門下には女性が多く、主宰する短歌結社「竹柏会」は女流歌人の登竜門として知られていた（pp. 87-88）。今春、評者は村岡花子訳（新潮社）とそれ以外の訳者による『赤毛のアン』を読み比べてみたが、村岡版の訳文が断然読みやすい根底には、日本語にとって最も自然な七五調のリズムがあると感じた。

そして、きわめつけは、花子が東洋英和女学校で出会った腹心の友、柳原燐子である。刑法に姦通罪が規定されていた1921年、有夫の女性と7歳年下の帝大生との駆け落ちには、厳しい処罰が待っている可能性があった。しかも、燐子の父は華族で、叔母が大正天皇の生母だったから、スキャンダルの規模が並大抵では

なかった。もっとも、男性の側もただ者ではない。後に燦子の夫となる宮崎龍介は、1911年の辛亥革命を成し遂げた孫文を日本で支援してきた宮崎滔天（1870-1922）の息子である。いずれにせよ、華族という身分に縛られ、価値観が全く違う相手との再婚という「座敷牢」に閉じこめられていた親友が、夫への絶縁状を新聞発表するという究極の手段をとった白蓮事件は、花子が婦人参政権運動や身の上相談を通じて社会の変革に携わっていく動機の一部になったのではない（第7章参照）。

戦争の足音は、花子の周囲にも暗い影を投げかける。政党政治が崩壊した日本では、東洋英和も文部省（当時）の指導の下、天皇の御真影を奉戴し、軍事教育、日の丸掲揚などを受け入れることを余儀なくされた（pp. 267-269）。盧溝橋事件から2年後の1939年には、花子の長年の友人で、カナダ人婦人宣教師だったミス・ロレッタ・レナード・ショー（1872-1940）も帰国を決意した（p. 270）。1872年にカナダ東部で生まれたショーは、1904年に英国教会（Church of England）の婦人宣教師として来日し、大阪のプール女学校（現プール学院大学）で27年間教壇に立ち続け、1931年から教文館で働いていた（同）。

友人の帰国を見送りに来た花子に、ミス・ショーは友情の記念として、1冊の本を渡す。これが1908年刊行の *Anne of Green Gables* であった。別れ際にカナダ人宣教師の残した言葉は重い。「いつかまたきつと、平和が訪れます。その時、この本をあなたの手で、日本の少女たちに紹介してください。」（p. 271）。皮肉なことだが、*Anne of Green Gables* が出版されたのは、ヨーロッパに第1次世界大戦の影が忍び寄る時代であった。

友人にもらった書籍を出版する日まで、花子は幾多の困難と試練に立ち向かわなければならなかった。開戦を機にラジオ番組への出演をやめた（pp. 274-275）。空襲がひどくなると、原書と翻訳原稿を風呂敷に包み、抱えて逃げ回った（p. 293）。焼夷弾が家の庭に落ちたこともあった（p. 297）。それでも、花子は2つとも守り抜いた。

1952年5月10日、村岡花子訳『赤毛のアン』がついに出版された。この日は、第2次世界大戦の連合国と日本が講和した日本国との平和条約（サンフランシスコ平和条約）が効力発生した1952年4月28日から2週間後のことだった。物語に飢えていた子どもたちはもちろん、国立大学など高等教育へのアクセスを大幅に改善された女性たちが、努力によって自分の道を切り開いていくアン・シャーリー

を熱狂的に迎えたことは想像に難くない。

花子の活躍は続く。戦前は婦人矯風会を通じて公娼廃止、少年禁酒法、婦人参政権のために運動してきたが、戦後は女性と子どもを含めたすべての人々の幸せを願って、日本ユネスコ協会連盟副会長に就任し、市川房枝の活動を支援した(p. 347)。産児制限の運動家マーガレット・サンガーが1952年10月に来日した際は通訳を務め、産児制限運動を推進していた日本の女性政治家の草分けである加藤シヅエとともに、1951年開設の民間放送ラジオ東京（現 TBS ラジオ）の座談会に出席した(p. 348)。1955年5月、ヘレン・ケラーが3度目の来日をした際は、帝国ホテルで開催された歓迎会で直接話をし、翌日に飯田橋富士見町教会で行われた講演の通訳を務めた(p. 349)。実は、ケラーが1947年に2度目の来日をした際、花子は日比谷公会堂で同女史の講演を聴いて感銘を受け、彼女の著書『私の半世紀』および『ヘレン・ケラーの救い主アニー・サリバン』を基に、子ども向けの伝記『ヘレン・ケラー』にまとめて偕成社から出版していた。

本書を読んだ評者にとって、何よりの収穫だったのは、花子が「ラジオのおばさん」としてラジオ JOAK 放送局（NHK の前身）の番組に登場し、「子供の新聞」と称して一家団欒の夕食の時間帯にほっとするような話題を中心にニュースを伝えていたことを知った点である(pp. 249-253 参照)。まるで、NHK 記者だった池上彰が大きく関わったテレビ番組「週刊こどもニュース」（1994-2010年放送）のようではないか。否、この放送は1932年6月に始まったので、花子の方が大先輩である。

花子の担当コーナーは子どものみならず大人にもたいそう喜ばれ、「ラジオのおばさん」が最後に発する「ごきげんよう」の挨拶は、巷で物まねされるほどであった(pp. 251-252)。花子の名前をかたって物品を購入する、あるいは花子の夫をかたって芸者遊びをし、請求書をつけ回してくる者さえ現れた(p. 252)。花子が『王子と乞食』などの数々の英米文学を翻訳してきた実績と、ラジオのパーソナリティーとして戦前から得ていた高い知名度は、『赤毛のアン』の面白さと訳の読みやすさを折り紙付きにしていたかもしれない。

このように、本書は単に村岡花子の生涯をまとめただけではない。時代の主要な動きを的確にちりばめ、女性史、そして日本社会が歩んできた道のりを俯瞰できるようにになっている。村岡恵理は、祖母の残した原稿等を丹念に読み込み、その生涯を明治・大正・昭和と言う3つの時代の大きな流れに見事に再構成した。

まさに、著者の筆力の賜といえよう。中学校や高校で歴史の時間が苦手だった人でも、本書を読めば自然と歴史が好きになるに違いない。なぜなら、歴史は人間ドラマの集大成であり、本書は「村岡花子とその時代」を描いたからである。

現在、赤毛のアン展実行委員会他が主催する「日加修好85周年記念『モンゴメリと花子の赤毛のアン展』」が全国を巡回している。この展覧会では、ミス・ショーが村岡花子に渡した *Anne of Green Gables* (ショーのサイン入り)、花子が戦時中の灯火管制下で作業を続けた『アン・オブ・グリーン・ゲイブルス』の翻訳原稿用紙、1952年初版の『赤毛のアン』(三笠書房刊)、原作者モンゴメリの手書き原稿、絶筆となった *The Blythes Are Quoted* (邦題『アンの思い出の日々』。2012年刊)、モンゴメリが1897-1899年に作っていたスクラップブック(日本初公開)など、貴重な資料が多数展示されている。『アンのゆりかご』を読了した人は、村岡花子という人格がどのように育まれていったか、また、女流文学者として道を開拓していったモンゴメリと花子の共通点に花子が何を感じたか、「想像の翼」を広げることができるだろう。

最後に、*Anne of Green Gables* は本国カナダでの人気がやがて米英に伝播したが、日本での人気ぶりはカナダの研究者たちが研究対象とするほどである。40歳代の日本人で、1979年に初回放送された世界名作劇場「赤毛のアン」(アニメ)で初めて『赤毛のアン』を知ったという人は少なくなく、アニメの放送(再放送を含む)がファンを広げたことは間違いないだろう。それにしても、『赤毛のアン』(とおそらくアニメ「赤毛のアン」)がこれほどまで日本で人気を得ているのはなぜか。評者はいくつかの仮説を立てているが、その詳細は別稿にゆずりたいと思う。

(2014年 8 月 1 日脱稿)

<参考サイト>

赤毛のアン記念館・村岡花子文庫

http://club.pep.ne.jp/~r.miki/index_j.htm (2014年 7 月31日最終アクセス)

飯塚市「旧伊藤伝右衛門邸」

<http://www.city.iizuka.lg.jp/jiman/kanko/kanko/itoutei/> (2014年 7 月31日最終アクセス)

飯塚商工会議所 旧伊藤邸保存育成会『旧伊藤伝右衛門邸』を郷土の文化遺産

に！」

<http://www.iizuka-cci.org/tiiki/kankou/itoutei/itoutei.html> (2014年7月31日最終アクセス)

NHK「NHKアニメワールド 赤毛のアン」

<http://www9.nhk.or.jp/anime/anne/> (2014年7月31日最終アクセス)

———.「連続テレビ小説 花子とアン」

<http://www.nhk.or.jp/hanako/> (2014年7月31日最終アクセス)

川村英文学会 Newsletter (川村学園女子大学)「特別講演 村岡花子と『赤毛のアン』～翻訳に込めた思い～『赤毛のアン記念館・村岡花子文庫』主宰 村岡美枝先生」

http://www.kgwu.ac.jp/faculty/bungakubu/kokusai/newsletter/newsletter_16/02.html
(2014年7月31日最終アクセス)

教文館「花子とアンへの道 村岡花子 出会いとはじまりの教文館」

<http://www.youtube.com/watch?v=t5effHdxoPg> (2014年7月31日最終アクセス)

熊本県荒尾市観光情報サイトまるごとあらお「荒尾の歴史 宮崎兄弟の生家/宮崎兄弟資料館」

<http://arao-kankou.jp/sightseeing/history/miyazakibrothers.html> (2014年7月31日最終アクセス)

———.「荒尾の歴史 宮崎滔天と宮崎兄弟物語」

<http://arao-kankou.jp/sightseeing/history/miyazakibrothers2.html> (2014年7月31日最終アクセス)

公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団「映画『赤毛のアン グリーンゲールズへの道』公式サイト」

<http://www.ghibli-museum.jp/anne/top.html/> (2014年7月31日最終アクセス)

国立国会図書館「近代デジタルライブラリー 村岡花子童話集」

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1169934> (2014年7月31日最終アクセス)

———.「近代日本人の肖像 佐佐木信綱 ささきのぶつな (1872-1963)」

<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/272.html> (2014年7月31日最終アクセス)

静岡県熱海市「佐佐木信綱旧居 凌寒荘(りょうかんそう)」

http://www.city.atami.shizuoka.jp/page.php?p_id=613 (2014年7月31日最終アクセス)

新潮社「著者一覧 村岡恵理」

<http://www.shinchosha.co.jp/writer/4306> (2014年 6月16日最終アクセス)

TBS ラジオ「ラジオ東京スピリッツ TBS ラジオ開局60周年」

<http://www.tbs.co.jp/radio/radiotokyo/> (2014年 7月31日最終アクセス)

東京都大田区「赤毛の안의翻訳者 村岡花子が暮らしたまち 大森」

http://www.city.ota.tokyo.jp/kanko/hanako_m/index.html (2014年 6月16日最終アクセス)

東洋英和女学院大学「村岡恵理プロフィール」

http://www.toyoeiwa.ac.jp/topics/topi_32.html (2014年 7月31日最終アクセス)

———.「村岡花子と東洋英和」

http://www.toyoeiwa.ac.jp/topics/topi_45.html (2014年 7月31日最終アクセス)

日加修好85周年記念「モンゴメリと花子の赤毛のアン展」

<http://anne.jp-keepexploring.canada.travel/hanako/exhibition.php> (2014年 7月31日最終アクセス)

Nippon Animation「作品紹介 赤毛のアン」(初回放送1979年 1月-12月)

http://www.nippon-animation.co.jp/work/akageno_ann.html (2014年 7月31日最終アクセス)

———.「作品紹介 こんにちはアン Before Green Gables」(初回放送2009年 4月-12月)

http://www.nippon-animation.co.jp/work/konnichiha_anne_bgg.html (2014年 7月31日最終アクセス)

富士の国やまなし観光ネット「山梨県出身『赤毛のアン』翻訳者 村岡花子の生涯」

http://www.yamanashi-kankou.jp/shingen/documents/shingen-ko_festival_p58-69.pdf
(2014年 7月31日最終アクセス)

「花子とアン」推進委員会「村岡花子の過ごしたまち甲府」

<http://www.city.kofu.yamanashi.jp/hanakotoannesuishiniinkai/muraokahanako.html>
(2014年 7月31日最終アクセス)

パナソニック『建築設計 Report』「旧伊藤伝右衛門邸」(2013年 2月15日発行)

http://www2.panasonic.biz/es/report/archi/vol04/adr04_21_22.pdf (2014年 7月31日

最終アクセス)

三重県鈴鹿市「佐佐木信綱記念館」

http://www.city.suzuka.lg.jp/life/shisetsu/9207_04.html (2014年 7月31日最終アクセス)

三菱グループ「三菱の人ゆかりの人 vol. 22 澤田美喜 (上)」

<http://www.mitsubishi.com/j/history/series/man/man22.html> (2014年 7月31日最終アクセス)

———.「三菱の人ゆかりの人 vol. 23 澤田美喜 (下)」

<http://www.mitsubishi.com/j/history/series/man/man23.html> (2014年 7月31日最終アクセス)

山梨英和中学校・高等学校「歴史・沿革・校歌 英和教育の基礎をすえた、カナダの女性宣教師たち」

<http://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/jsh/ab-his.html> (2014年 7月31日最終アクセス)

Arita, Eriko. “Of orphans and granddaughters: Making its 100th anniversary, ‘Anne of Green Gables’ still touches hearts in Japan”. *The Japan Times*. January, 18, 2009.

http://www.japantimes.co.jp/life/2009/01/18/general/of-orphans-and-granddaughters/#.U9rEaON_tUg (2014年 7月31日最終アクセス)

Biography, Canada. SHAW, LORETTA LEONARD.

http://www.biographi.ca/en/bio/shaw_loretta_leonard_16E.html (last visited 31 July 2014)

The L. M. Montgomery Institute, the University of Prince Edward Island.

<http://www.lmmontgomery.ca/> (last visited 31 July 2014)

The Official Website of the Lucy Maud Montgomery Society of Ontario. “Resources.”

<http://lucymaudmontgomery.ca/resources/> (last visited 31 July 2014)

Prince Edward Island. “Sources for L. M. Montgomery Materials.”

<http://www.tourismpei.com/l-m-montgomery-materials> (last visited 31 July 2014)

Ryerson University, Canada. “The Anne of Green Gables Centenary.”

<http://www.ryerson.ca/mlc/anne/inside7.html> (last visited 31 July 2014)

Sullivan Entertainment. “Anne of Green Gables.”

<http://anne.sullivanmovies.com/> (last visited 31 July 2014)